

咀嚼困難がある方は、やせ因子も認められた。

～千葉県の特健健診と特定保健指導のデータを用いた分析～

本研究では、やせと特定健診の歯科保健に係る標準的な質問票の質問項目との関連を明らかにすることを目的に行いました。

分析対象は、県内すべての54の市町村から得られた特定健診・特定保健指導の電子データである平成30年度および令和元年度の性、年齢、BMI、食事をかんで食べる時の状態を含む歯科保健に係る標準的な質問項目6問としました。解析に用いたデータは、歯科保健に係る標準的な質問項目6問すべてに回答した208,987人（男性86,656人、女性122,331人）としました。

分析方法は、平成30年度にBMI18.5以上で令和元年度にBMI18.5未満になった者と令和元年度も引き続きBMI18.5以上となった者との間で行い、多変量ロジスティック回帰分析等を用いました。オッズ比の結果は、オッズ比および95%信頼区間が1を超えている場合に有意なやせ因子、1を超えていない場合に有意な非やせ因子としました。

本研究の結果は、咀嚼困難がある方には有意なやせ因子が認められました。【男性OR=1.327、95%CI=1.216-1.448、女性OR=1.196、95%CI=1.141-1.253】。

今後、生活習慣病だけでなく、やせに着目した健診や保健指導等の体制を整えていく必要があると思われれます。